

全林研会長賞

大分県

## くす 玖珠郡林研グループ連絡協議会

所在地 > 大分県玖珠郡玖珠町

設立 > 昭和53年以前

会員 > 男24人

年齢 > 31歳～80歳 平均61歳

### 主なプロジェクト

- ◆ 地域に貢献する活動

### ☒ 郡林研で行う 後継者の育成・確保の取り組みについて ☒

#### 1. 地域の概要

私たちが活動する玖珠郡は、大分県西部の内陸に位置しています。

玖珠盆地を中心に、日本屈指のメサと呼ばれる、卓状の台地に囲まれ、東に広大な日出生台原野、東南には九重連山、大吊橋で有名な飯田高原、北に紅葉の耶馬溪と、大部分が、「阿蘇くじゅう国立公園」と、「耶馬日田英彦山国定公園」にあたる、豊かな自然に恵まれたところです

九重九湯といわれる豊富な温泉群と、慈恩の滝ほか、日本の滝100選や、平成の名水100選などに選ばれる数多くの滝や湧水郡も、随所に見られます。国指定の名勝も多くあります。この機会に、温泉と自然に恵まれた玖珠郡に関心を持っていただければ幸いです。

玖珠郡の総面積は5万5,785haであり、その内林野面積は4万1,572haの74.5%を占め、県平均の70.9%を上回る地域です。内民有林は3万5,591ha



(85.6%) となっています。

保有形態別 森林面積 (ha)		森林面積	国有林	民有林	総土地面積	森林率
	九重町	21,501	4,384	17,117	27,141	79.2
	玖珠町	20,071	1,597	18,474	28,644	70.1
	郡 計	41,572	5,981	35,591	55,785	74.5
県 計	449,624	46,639	402,985	633,958	70.9	

また、農林業の盛んな地域で、従来は「水稻と、乾シイタケに、素材生産」の組み合わせが中心でしたが、近年はハウスを使ったピーマンや生シイタケ、冷涼で寒暖差の大きい気候を活かした、夏秋野菜の栽培などが盛んに行われています。また、ここ数年で西日本一のブルーベリー産地となっています。

## 2. グループの概要

山どころである玖珠郡では、昭和35年北山田林研グループの発足を皮切りに、林研グループが地域ごとに発足し、昭和55年にはグループ数10団体、会員106名を数えました。

玖珠郡林研グループ連絡協議会は、設立時の記録がすでに消失しており、昭和53年以前の活動状況は分かりませんが、規約は現在も当初からの文言を引き継いでおり、第1条で会の目的を「郡内の林研グループが相互に連絡調整して単位グループの発展を図る」と定めています。

単位林研の半世紀の歩みとともに変遷し、折々の単位林研に必要なサポートを模索しながら活動を行ってきました。

玖珠郡林研連の変遷	S55-10団体 (106人)	H6-6団体 (49人)	H25 (現在) -4団体 (24人)
(九重町) S39 南山田	○	○	
S40 野上	○	○	> H14合併 九重 ○
S5* 飯田	○ (H1解散)		
S5* 東飯田	○ (H5解散)		
-----			
(玖珠町) S35 北山田	○	○	○
S40 古後	○	○	○
S37 玖珠	○	○	
S47 山浦	○	○	> H14合併 山浦 ○
S5* 森	○ (H4解散)		
S5* 八幡	○ (S60解散)		

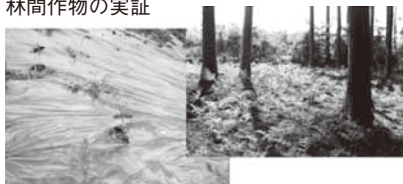
現在は、4団体、会員24名での活動となっています。婦人林研1団体も、一緒に活動を行っています。

本会会員の所有林は、合計で578ha、平均所有面積23haです。

本会は、林業専門業者が大半でしたが、近年の材価の低迷、特に大分県に未曾有の被害を残した平成3年の台風17、19号以降は、兼業でなければ経営が困難になりました。

大分県の主要な林産物であるシイタケ生産も、乾シイタケ7t、生シイタケ70tの生産量があります。

林間作物の実証



地域の間伐推進



活動では、単位林研ごとに 優良品種の選定、試験、 保育作業・間伐の推進、 林間作物の実証試験、販売、 加工品開発など積極的に具体的な活動を進めているので、郡林研では、設立当初から交流会に力を注いでいます。

ソフトボール大会や、視察研修なども良い情報交換の場を担ってきました。各種コンクールなどの顕彰活動も、郡林研の大切な役割でした。

最近では、会員も資源も成熟期に入ったことで、研修では間伐推進が主力となり、内容も、初期の、会員が学ぶ研修会から、会員が指導者として範を示す趣旨のものに変わってきました。

そして、現在もっとも力を入れているのが後継者の育成・確保の取り組みです。

### 3. 活動内容

近年の単位林研活動は、材価の低迷に対し、タラノメやゼンマイなどの林間作物の実証試験や、吸収源対策としての間伐推進活動などに力を入れています。

こうした中で、本会が後継者の育成・確保の取り組みを始めることになったのは、私たちが活動する地域に目を向けたとき、地域を担ってきた世代の交代は、ゆっくりながら確実に進んでいるのに対して、その後継者や、子どもたちに、山とのかかわりや、技術の伝承は成されているのだろうか？と感じたことからです。

きっかけは、全林研の事業活動である「林業後継者育成・確保支援事業」を知ったことで、後継者育成の取り組みを、郡林研活動として行ってみようということになりました。

具体的には、郡内の小学生を対象に、地域の重要林産物である「シイタケ」の駒打ち体験をつづじた林業体験の提供を行いました。

主な、取り組みは以下のように進みました。

学校との調整（事前準備）

個別の学校ではなく、地域全体への取り組みを想定し、教育委員会への申し入れから始め、校長会での説明を経て、希望する学校と個別に打ち合わせを行いました。

教育委員会と学校に対しては、具体的な活動内容を書いた「提案の資料」を用意し、当初は「間伐や枝打ちなど、山での林業体験教室」の実施を考えていましたが、結果として、「シイタケ駒打ち体験」に要望が集まりました。

資材準備、教材の作成（事前準備）

「資材は自己調達、教材は副読本で」と軽く考えていましたが、実際に子どもたちに教室を行う前提で準備が始まると、より分かりやすく伝えるために教材が増えていきました。



当日の準備（資材、会場、指導の準備）

当日の運営（屋内・現地での指導）

当日は、学校の授業時間を頂いているので、時間の管理と、とにかく安全に実施することに注意を払いました。

指導では、森林インストラクターの





資格を持つ会員を中心に、説明や体験メニュー以上の思いを子どもたちに伝えるように配慮しました。

片付け

シイタケ発生までの見守り

学校と良い関係を維持し、体験の成果（シイタケ発生）を子どもたちに味わってもらうことで、活動が継続し、活動の本当の成果を作っていく必要があります。

#### 4. 活動成果

現在までの4年間で、429名の子どもたちに、体験を提供することができました。

こうして進めていくことができたのは、事業を使うことによって、経費や資材の心配がなかったことと、林研の長い実績や人脈によって、活動当初から教育委員会や学校と、信頼を築けたことが、大きいように思います。



地域活動としての成果

学校の評価は、いずれも好評で、開催希望が続き、順調に活動が広がっています。

取り組んだ学校からは「来年も実施したい」と要望があるため、開催は順番待ちのような状況になっていて、活動が地域に認められ、定着したと感じます。

林研活動としての成果

取り組んだ郡林研としては、「子どもたち」や「学校」などの外の組織に対する活動に、初めて踏み出したことで、これまでは、専ら、単位林研や地元の枠内で積み上げていた、いわば「自分たちだけのために行ってきた」活動を、グループの「外の組織」や、「地域の将来」に向けた活動へ、発展させるきっかけとなりました。

フォレスターネット 2015

会の目的を「郡内の林研グループが相互に連絡調整して単位グループの発展を図る」として活動を続けてきた郡林研ですが、実際の現地活動を軸に行ってきた単位林研に対して、集合研修や視察など、交流と情報交換を軸に継続してきた郡林研の取り組みには、より実践的な人づくりの素地があったことを、この報告の取りまとめを通じて感じています。

## 5. 今後の取り組み

今後は、定着してきた現在の活動を長く継続して続けることを第一に考えています。

さらに、活動を継続するなかで出てくる「もっとやってみたい」というアイデア、例えば...

- 乾シイタケのおいしさを伝える料理教室の共催
- 実際に山に入って、五感に訴える林業体験活動

等にも、取り組んでいきたいです。

後継者の育成・確保は、一朝一夕にかなうものではありませんが、今後とも外部の人たちと、地域の未来に働きかける新しい試みに、楽しみを持って挑戦していきたいと思います。

新しい活動に取り組んでこそ見えてくる次の可能性を、当林研が、諸先輩方から受け継いできた50余年の歴史と活動の和によって、細く長く地域とかわりながら、今後ともつづけて参ります。